

イタリア語における過去を表す時制について

- 近過去形・遠過去形・現在形 -

チェスパ・マリアンナ
Cespa Marianna

はじめに

本論は、イタリア語の現在形、近過去形と遠過去形の相関関係を明らかにすることを目的としている。伝統的な文法¹⁾は「未完了相」を表す時制(*tempi imperfettivi*)と「完了相」を表す時制(*tempi perfettivi*)の対立を中心に構成されているが、後者の枠に属している近過去形と遠過去形のアスペクティックな対立には通常言及されない。よって、近過去形が単なる過去を表す時制として説明されるため、遠過去形との相違点が無くなり、近過去形と遠過去形は「置き換え」可能とされている。さらに、伝統的な文法で相違点として言及されるのは「心理的な距離」のみで、それによって話し手は近過去形を用いるか、遠過去形を用いるかという選択をされるとされるが、この点についても必ずしも説明が十分ではない。しかも、実際に用いられている時制²⁾を分析すると置き換えられない場合もあるため、近過去形と遠過去形の共通点と相違点を明らかにする必要がある。また、伝統的な説明では過去時制に属する近過去形と遠過去形は現在時制とは無関係であるとされ、「過去」と「現在」の間にはそれらを分ける線があるという印象を与える。しかし、現在形も過去に起こった出来事を表すことができるため、過去時制との相関関係を明らかにする必要がある。このように、本論での主な論点は、a) 近過去形と遠過去形の相関関係、並びにb) 近過去形と現在形の相関関係、の2点について明らかにすることであるが、これらを説明するためには近過去形における「二重性」を認めなくてはならない。この「二重性」というのは、近過去形には「完了的」用法と「アオリスト的」用法があるという意味である。伝統的な文法はテンスの視点からのみ説明し、アスペクトの視点が欠如しているので不完全な説明であると言える。このようにアスペクトの観点を導入すると近過去形は二種類に分けられることになり、複文での時制の一致のルールにも再考が必要となる。また、過去時制と現在形の関係については以下のことも言える。たとえば、物語などを観察すると、時制は一般的には過去時制のみが用いられ、近過去形と遠過去形の使い分けは書き手による選択であるが、実際には現在形の使用も可能な場合がある。さらに、本論では書き手（または話し手）は過去時制と現在形の使い分けで何を意図するか、という問題点に関しても述べていく。最後に、近過去形と遠過去形の置き換え可能性とともに、過去の事象に対し近過去形と現在形の置き換えの可能性に関しても触れる。

1. 近過去形と遠過去形の相関関係について

近過去形と遠過去形の用法の相違として挙げられるのは話し手の心理的な判断である。それは発話時以前に起こった事象の結果が発話時において持続しているか否かということであり、それにより話

し手が近過去形を用いるか遠過去形を用いるかを判断する。Vanelli & Salvi (2004:115)では以下の例文が挙げられている。

- (1) Ho comprato questa macchina venti anni fa. (この車を20年前に買った)

この例文が発話されるのは話し手がその車をまだ持っている場合のみとされる。つまり、遠過去形が用いられると、話し手は「その車をもう持っていない」という意味になるというが、必ずしもその説明は完全ではない。本論は例文(1)がその車を発話時において持っていなくとも可能であるという立場から述べる。なぜなら、もう持っていない車の写真を誰かに見せながらその発言をしても不自然ではないからである。このように、近過去形の用法が遠過去形の使用領域に近いものであるように見える場合があり、これはおそらく現代イタリア語の近過去形における「アオリスト化(Aoristicizzazione)」によるものである。これにより近過去形は過去時制としての機能は失わないが、遠過去形の領域を侵害するため、完了的アスペクトの機能は失うということになる。これは近過去形と遠過去形の使用領域が接近している例であると言える。すでに述べたように、近過去形と遠過去形の選択は話し手による使い分けであるが、分析してみると、置き換えられない場合もある。そのため、区別を明確にしないと事態の時間的な解釈が不正確になる可能性もある。以下、どういう場合にそれが可能であるか、そしていつ不可能であるか、またなぜこのような用法の相違が生じるかという疑問に例文を挙げながら説明していく。最初は、そのような「置き換え」が可能である場合である。

【置き換えが可能である例文】

- (2) Lui lesse la Divina Commedia. (遠過去形) (彼は神曲を読んだ)
(3) Lui ha letto la Divina Commedia. (近過去形) (彼は神曲を読んだ)

上記の例文(2)も(3)も過去における出来事を描写している例文であるため、遠過去形も近過去形も可能であるが、時制の選択によるニュアンスは異なる。後者の場合、「神曲を読む」行為は過去に起こったものではあるが、その行為による結果が話し手にとって心理的に発話時まで持続しているというニュアンスが伝えられる。それに対し、前者は「神曲を読む」行為は過去の描写にとどまり、その行為の結果と発話時との関係は話し手にとって無関係であるというニュアンスが与えられると言えるだろう。この相違は近過去形と遠過去形の本質に関わるものであり、「単純時制」の遠過去形は過去において終了した事態を描写する時制である。それに反し、「複合時制」である近過去形は適用の幅がより広く、過去に限らず未来に近い用法も可能とする時制である。過去時制に限らず、一般に「単純時制」と「複合時制」ⁱⁱⁱの相違として「設定時点」の有無が挙げられる。「複合時制」は「設定時点」が明確化された時制である。以下、Bertinetto (1986:73)による「設定時点」^{iv}とそれに関係した「アオリスト的アスペクト」と「完了的アスペクト」(Bertinetto 1986:199)の定義を挙げる。

“Per MR (Momento di Riferimento) si intende un intervallo di tempo in cui il risultato di un evento viene valutato nella sua compiutezza (si tratta di una nozione squisitamente aspettuale)”.

「設定時点」とは時間区間のことであり、その区間においてある事象の結果が完了したものととして解釈される（もっぱらアスペクト的な概念である）。

“L'aspetto aoristico è quella particolare valenza aspettuale che designa un processo interamente concluso, di cui viene visualizzato esclusivamente l'istante terminale, senza che tuttavia le conseguenze derivanti dal medesimo vengano considerate attuali dal parlante”.

「アオリスト的アスペクト」とは、完全に終了した事象の終了の局面のみを描写するアスペクトの一種である。この場合、発話時においてその事象の結果は話し手にとって無関係である。

“L'aspetto compiuto è quella particolare valenza aspettuale che esprime il perdurare, nel momento di riferimento dato, del risultato conseguente ad un evento compiutosi in precedenza”.

「完了的アスペクト」とは、設定時点において以前に生じた事象の結果が持続していることを表すアスペクトの一種である。

以上のように、アスペクトの視点から考察すると近過去形と遠過去形における相違がより明らかになるが、以下の例文でその相違を具体的に示すことができる。以下の例文では、近過去形のみが可能であり、遠過去形への「置き換え」は不可能である。

【置き換えが不可能である例文】

- (4) *Un altro esame ancora e finisti il corso. (遠過去形) (試験をもう一つ受ければ課程を終了する)
(5) Un altro esame ancora e hai finito il corso. (近過去形) (試験をもう一つ受ければ課程を終了する)

例文の(2)、(3)と、この例文(4)、(5)では時制の適用に関して相違がある。すでに述べたように、近過去形も遠過去形も過去に起こった動作を示す時制であるが、例文の(2)～(5)をテンスの視点からのみ考察してもその相違が明らかにならない。そのため、この二つの時制はアスペクトの視点からも考察されなくてはならないと本論では主張している。なお、本論では、以上の考察に基づいて近過去形により描写された事態に対して「完了」、遠過去形により描写された事態には「終結」という異なった表現を用いることにする。この違いは以下のようにまとめることができる。

【アスペクトの視点による相違】

- ・遠過去形は「アオリスト的アスペクト」の視点から事象を表す。
「アオリスト的アスペクト」は過去において完全に終結した事象の最終局面のみを描写する。
 - ・近過去形は「完了的アスペクト」の視点から事象を表す。
「完了的アスペクト」は過去に限らず設定時点におけるそれ以前に起こる事象の結果の持続を表す。
-

以下、例文を挙げて「終結」と「完了」の概念の相違を明らかにしていく。例文(6)の「perse」が「終結」、例文(7)の「ha perso」が「完了」に対応している。

- (6) Per consolarmi, cercai di pensare ad una madre che perse il proprio figlio. (遠過去形)
(7) Per consolarmi, cercai di pensare ad una madre che ha perso il proprio figlio. (近過去形)
(気持ちを静めるために、自分の息子を失ったお母さんのことを考えるようにした)

- (6) 遠過去形 → 息子を失ったお母さんが特定できる人であり、その事象は過去においてすでに起こった事象である。
(7) 近過去形 → 息子を失ったお母さんが架空のお母さんであり、その事象の時間的な位置づけは不明である。

より詳しく説明すると、遠過去形が用いられている例文(6)の「息子を失ったお母さん」が「特定できる人」と言えるのはその内容が「すでに起こった事象」であるからである。これに反し、近過去形により描写された例文(7)で「架空のお母さん」と言えるのはその「事象の時間的な位置が不明」であるからである。すなわち、すでに述べているように、近過去形は「完了的アスペクト」を表す時制であるため、その事象の生起が必ずしも過去に限定されず、「設定時点」の位置が設定できるという説明ができる。「設定時点」の位置により解釈が変わり、発話時以降に位置づけられているならその事象はまだ生起していない解釈になるのに対して、設定時点の位置が発話時に位置づけられているならその事象が発話時以前に生起したという解釈になる。よって、「息子を失う」という出来事が起こっていない解釈も可能であることが、それを認めない例文(6)との重要なちがいである。このように、近過去形と遠過去形の置き換えが常に可能であるという伝統的な説明は不適切である。さらに、置き換えが可能である場合でもその時制による解釈が実は同じではないことも明らかになった。これはその時制の本質によると考えられる。他方、すでに述べたように、近過去形は二重性をもつ時制であるため二つの用法を可能とするが、この二重性は複文の一致のルールに対しても影響を与えるというのが次節の主張である。

2. 主節における過去時制について

「時制の一致」とは、主節と従属節双方の動詞の時間的相関関係を捉えた概念であり、イタリア語や英語のような言語では、その相関関係が固定されている。Vanelli L. & Salvi G. (2004)は、「牽引ルール (Regola di attrazione)」によって主節の時制が過去時制である場合、従属節の時制もその影響を受け過去形になるとしている。説明として以下の例文が挙げられる。

(8) Gli dissi/ho detto che partivi.^v (遠過去形／近過去形 - 半過去形)

(私は彼にあなたが出発すると言った)

上記の例文では、主節に遠過去形と近過去形の両方が可能である。ここでの近過去形は過去時制として解釈されている。しかし、本論で主張しているように、近過去形には二重性が認められ、主節において用いられる近過去形が「完了的」用法であるか「アオリスト的」用法であるかにより従属節の時制は変わり得る。近過去形が「完了的」用法である場合、従属節には現在形も可能である。説明として以下の例文が挙げられる。

(9) a.*Gli dissi che parti. (遠過去形 - 現在形) (私は彼にあなたが出発すると言った)

(9) b.Gli ho detto che parti. (近過去形 - 現在形) (私は彼にあなたが出発すると言った)

「牽引ルール」に従い上の例文(9a)は明らかに非文であるが、(9b)は主節の動詞が近過去形であるにもかかわらず、一般的には非文とならない。なぜなら、この近過去形は「アオリスト的」ではなく「完了的」であるからである。近過去形には二種類あり、「アオリスト的」近過去形は遠過去形と同じクラスをなすのに対し、「完了的」近過去形は現在形と同じクラスを構成する。すでに述べたように、遠過去形が発話時と無関係であるので、この時制と同じクラスに属する近過去形を「現在と切り離されている近過去形」、また現在形と同じクラスに属する近過去形を「現在と切り離されていない近過去形」と呼ぶこととする。まとめると、以下のように表される。

図1. 「近過去形における二重性」

・現在と切り離されている近過去形	例 (8)	→	<u>遠過去形</u> と同じ扱い
・現在と切り離されていない近過去形	例 (9b)	→	<u>現在形</u> と同じ扱い

従って、(9b)の例文は、以下の例文(10)におけるような、現在形に適用されるルールが近過去形に対しても適用されたものということが出来る。

- (10) Gli dico che parti. → 「ho detto」 = 「dico」 (現在形 - 現在形) → (近過去形) = (現在形)
 (私は彼にあなたが出発すると言う)

上記のことから、主節の時制が近過去形の場合、用法のちがいによって時制の一致のルールが異なってくるのがわかる。まとめると、本論は主節における過去時制を以下のように分けることができると提案する。

図2. 主節における過去形の対立

主節	アスペクト			
・遠過去形	アオリスト的	→	現在と関係なし	
・近過去形 (I)	アオリスト的	→	現在と関係なし	(遠過去形と同じ機能)
・近過去形 (II)	完了的	→	現在と関係あり	(現在形と同じ機能)

上記の例文(8)～(10)と上記の図(2)から、次のように時制の一致のルールをまとめることができる。主節において遠過去形が用いられた場合、「牽引ルール」に従って従属節において用いられるのは過去時制であるが、主節において近過去形が用いられた場合、二つの可能性がある。近過去形が「アオリスト的」(すなわち近過去形I)であるなら従属節において過去時制の適用が適切であるのに対して近過去形が「完了的」(すなわち近過去形II)であるなら従属節において現在形の適用が可能となるということになる。

3. 近過去形と現在形の相関関係

物語などを観察すると一般的には時制は過去時制のみが用いられ、近過去形と遠過去形の使い分けは話し手による選択である。そのような場合、現在形の適用も可能であるか、そしてどのような場合において可能であるかを以下に検討していく。Weinrich (1973) は過去形に関し次のような提案を行っている。まず、時制の使用は ①「コメントのレベル」と ②「物語のレベル」に分けられると主張し、それぞれのレベルに属している時制は①現在形、近過去形、未来形と②遠過去形、半過去形、大過去形であるとしている。すなわち、「コメントのレベル」であるか「物語のレベル」であるかにより可能となる時制が変わる。この使い分けは話し手(または語り手)がどの情報を伝えたいかを明らかにする手段であり、聞き手(または読み手)はその影響を受けると言える。近過去形は「コメントのレベル」に属しているため、「話し手・語り手の関与」を表す機能を果たしているとされている。例えば、物語の結末においてよく用いられている時制が近過去形であるのは、その時制を介して語り手は読み手に直接話しているような雰囲気をつくることができるからである。それとは異なり、遠過去形

を用いるとそのような親しい関係をつくることが出来ない。また、遠過去形は「物語のレベル」に属しているため、近過去形とはレベルが異なるが、Weinrichが言及しているのは半過去形との対立のみである。なぜなら、この提案によると時制の選択はアスペクトによるものではなく、もっぱら文脈における位置づけによるものであるからである。しかし、本論は近過去形の二重性を認める立場から論じているので、以上の説明は必ずしも適切なものとは思われない。「完了的」近過去形と「アオリスト的」近過去形の区別を導入すると、それらはどちらのレベルに属するかという問題が生じてくる。

以上からわかるように、ここでは四つの時制の区別をしなくてはならないことになる。それは遠過去形、現在形、近過去形Iと近過去形IIである。過去の文脈において現在形の適用も可能であるのか、可能であるならなぜ可能なのか、そしてその場合、現在形と過去時制はどのような関係にあるのかについても説明する必要がある。遠過去形、近過去形と現在形が用いられている以下の例文を見ると、時制の相関関係と用法の相違が明らかになる。(Bertinetto 1986:335)

- (11) *Stavamo aspettando il treno. All'improvviso giunge trafelato Enrico. Ha appena parlato con il capostazione e dice che il rapido arriverà con molto ritardo. Fu così che decidemmo di prendere l'espresso.*
(私達は電車を待っていた。突然、エンリコが走ってくる。ちょうど駅長と話したところで、特急がかなり遅れそうだという。そこで、急行に乗ることにした)

この例文(11)は現在形と過去形(近過去形と遠過去形)の両方を用いて過去の事象を描写する文章である。これは、現在形が近過去形(*ha parlato*)や遠過去形(*fu, decidemmo*)と対立する時制なので、文体的効果が現れるのである。また、現在形が用いられることで、話し手の意図も明らかになると言える。これについて説明する前に、例文(11)における近過去形の用法を説明する。まず、近過去形の「*ha parlato*」は「アオリスト的」用法ではなく「完了的」用法で、遠過去形との置き換えが不可能である。さらに「アオリスト的」用法として解釈すると、先行する現在形の「*giunge*」やその後にある、やはり現在形の「*dice*」と相容れないので非文になってしまう。次に、遠過去形「*fu*」と「*decidemmo*」は「アオリスト的」近過去形に置き換えることが可能であるが、これは話し手(または語り手)による選択である。一般的には背景を描写するのにより適切な時制は遠過去形であるが、話し手の伝えたい情報により近過去形の適用も可能である。最後に、現在形の「*giunge*」と「*dice*」の「完了的」近過去形への置き換えも可能であるが、この場合でも話し手の伝えたい情報によって時制が選択される。現在形を用いると話し手の過去における出来事に対する関与が表されるのに対し、近過去形の使用は主観的背景の描写にとどまる。以上のように、例文(11)では四つの時制が用いられるため、Weinrichの提案を完全に適用することができない。ここで問題となるのは近過去形(I)と(II)の位置づけと過去時制が用いられる文章における現在形の働きである。まず、「コメントのレベル」と「物語のレベル」の区別を本論でも認めるが、上の提案とは異なり、「物語のレベル」に属している時制は四つであると提案する。つまり、遠過去形、半過去形と大過去形以外に近過去形Iもそのレベルに属する時制であるとする。近過去形は両方のレベルに属する時制になるが、これは言うまでもなく二重性

をもつ時制であるからである。また、問題となってくるのは遠過去形と近過去形Ⅱの相違であるが、この点もアスペクトに基づく相違であると言える。前者は「語りの現在（または発話時点）」との関係を表さない時制であるため、客観的な背景を描写するのに適切なのである。つまり、遠過去形の使用により話し手（または語り手）の視点は現れないこととなる。それとは異なり、近過去形はアオリスト的であるとしても複合時制であり、必ずある時点が設定され、その時点を選択するのは話し手（または語り手）である。このように、書き手（または話し手）の時制の使い分けにより、その事象に対する客観性と主観性を次のように示すことができる。

【コメントのレベル】（主観性）

現在形（話し手・語り手の関与）

近過去形Ⅱ（完了的）

【物語のレベル】（客観性）

近過去形Ⅰ（アオリスト的）（設定時点あり）

遠過去形

最後に、過去の出来事を表現する現在形に対する制限に関しても述べなくてはならない。例文(11)では近過去形と現在形の置き換えが可能であると述べたが、常に可能であるとは限らず、制限があることにも注目すべきである。参考のため以下の例文を挙げる。

(12) *Ieri vado al cinema.

(13) Ieri vado al cinema e chi ci trovo? (昨日映画館に行って、誰がいたと思う?) → 「語り化」

例文(12)においても例文(13)においても現在形は過去の出来事を表すが、前者は明らかに非文であるのに対し後者は正しい文として認められる。前者と後者をよく比較してみると、ある点で異なっている。それは話し手の伝えたい情報であり、話し手はその出来事を生き生きとした「語り」として述べるなら現在形の適用が可能となる。現在形の適用が可能であるのは話し手により「語り化」された文のみであると言える。

おわりに

以上の議論からわかるように、時制の相関関係に関する従来の説明は不完全である。遠過去形と近過去形の「置き換え」が必ずしも可能ではないということが明らかになった。それは、この二つの時制の使用領域が異なるからである。本論は近過去形における二重性を認め、「完了的」用法と「アオ

リスト的」用法があるという立場から議論してきた。近過去形は二種類に分けられる必要があり、この区別は時制の一致のルールにも影響を与え、主節における近過去形の用法により従属節の時制が変わると言える。従って、主節における時制を遠過去形、近過去形（I）および（II）に分ける必要があり、それによりいつ置き換えられ、いつ置き換えられないかという区別も明らかになる。また、境界線を設定すると、近過去形（I）と遠過去形が一つのクラス、近過去形（II）と現在形が別のクラスに属することになる。そこから、近過去形と遠過去形の置き換えが可能であるのと同様、過去における事象では近過去形と現在形の置き換えも可能であると提案できる。ただし、近過去形には二重性があるため現在形に置き換えられるのは「完了的近過去形」のみであることに注意すべきである。そして、話し手の意図により、語り化が行われる場合もあると言える。

ⁱ Leone (1986), Dardano & Trifone (1985), Lepschy A.L. & Lepschy G. (1981)など。

ⁱⁱ 本論では北部（中部）における用法を対象とする。近過去形と遠過去形の用法は地方によって差があり、南部では遠過去形の使用が一般的であるのに対して北部または中部では近過去形が一般的であるとされる。Squartini M. & Bertinetto P.M. (1996, 2000)を参照。

ⁱⁱⁱ 本論は「複合時制」の中で近過去形のみに関して述べることにする。

^{iv} 近過去形の場合、設定時点が発話時において位置づけられている。それとは異なり、前未来形の場合には発話時以後、大過去形の場合には発話時以前に位置づけられる。

^v 従属節における半過去形については Giorgi (2002, 2010) を参照。

参考文献

- Bertinetto P.M. (1986). *Tempo, Aspetto e Azione nel verbo italiano:l'indicativo* - Accademia della Crusca, Firenze.
- Dardano M. & Trifone P. (1985). *La lingua italiana* - Zanichelli, Bologna.
- Giorgi A. (2002). *Per una teoria dell'interpretazione temporale delle frasi subordinate* - Università degli Studi di Venezia.
- Giorgi A.(2010). *About the speaker:towards a syntax of indexicality*. Oxford University Press, Oxford.
- Leone A. (1986). *Complementi di grammatica italiana* - Sansoni, Firenze.
- Lepschy A.L. & Lepschy G. (1981). *La lingua italiana* - Bompiani, Milano.
- Squartini M. & Bertinetto P.M. (1996). La distribuzione del Perfetto Semplice e del Perfetto Composto nelle diverse varietà di italiano – *Romance Philology, Volume XLIX, No.4*
- Squartini M. & Bertinetto P.M. (2000). The Simple and Compound Past in Romance languages – in *Tense and Aspect in the Languages of Europe* (edited by Östen Dahl), Mouton-de Gruyter, Berlin.
- Vanelli L. & Salvi G. (2004). *Nuova grammatica italiana* - Il Mulino, Bologna.
- Weinrich H. (1973). *Le Temps - Tempus*, Seuil, Paris.
- 坂本鉄男 (1979) 『現代イタリア文法』白水社、東京。